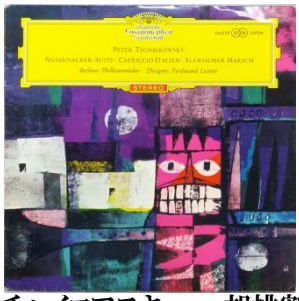
今週のお薦めレコード

このレコードを聴きタイ

第8037番　　税込み3300円



チャイコフスキー　胡桃割り人形組曲
イタリア奇想曲、スラヴ行進曲
ベルリン・フィル／ライトナー
独グラモフォン／136029／1959年録音／ステレオ

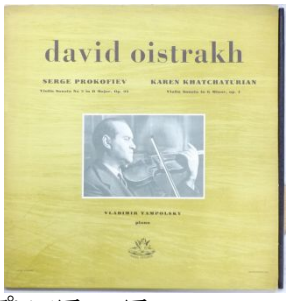
古きベルリン・フィルの厳かで重厚な響きで開始されるイタリア奇想曲に懐かしさを覚えるオールド・ファンは多いだろう。この響きは現在のドイツでは、たとえドレスデンでも失われている。（私見だがドレスデンの生の響きに、シカゴ響を感じたことがある）。スラヴ行進曲もまたロシア臭に対して深い音色が取って代わる。チャイコフスキーは元来ドイツ音楽を研究していたので、これは筋が通っているかも知れない。A 面のくるみ割りに戻れば明るい幸福感が漂っている。テンポを若干遅めにとっているところがライトナーらしい。花のワルツは少し粘り気味でバレエを離れた演奏会ピース的だ。（山田）

第8038番　　税込み3300円

ショーソン　ヴァイオリンとピアノと弦楽四重奏の協奏曲op.21
フォーレ　子守歌
ティボー（vn）、コルトー（p）、イスナール、ヴルフマン（vn）、ブランパン（va）、アイゼンベルク（vc）
仏パテ／2C051－03719／1931年録音／モノラル

歌謡性を大切にしたショーソンだけに、ティボーの詩的な美しさはたまらない。31年と言う録音年にも関わらず、この演奏をリアルタイムな遺産として楽しめることに感謝したい。弦楽四重奏のメンバーは二人の大家に追随するどころか、付かず離れず見事なアンサンブルを聴かす。詩曲を除けば最も親しまれている曲だけに、この深味を多くの人に共有して欲しい。子守歌は、思いのほかあっさりと演奏されるが、下手な感情の込めすぎよりも健康的でずっと良い。（山田）

第8039番　　税込み4400円



プロコフィエフ　ヴァイオリン・ソナタ第2番
カレン・ハチャトゥリアン　ヴァイオリン・ソナタop. 1
D. オイストラフ（vn）／ヤンポルスキー（p）
米エンジェル／35306／1955年録音／モノラル／イギリス・プレス／棒付きジャケ

プロコフィエフの作品はもともとフルート曲であり、跳躍にも滑らかな動きにもその名残があるが、名手の手になればもはやヴァイオリン・ソナタそのものである。作曲家はオイストラフの協力を得て編曲を試みたようで、まさにオイストラフの演奏によってこそ名曲が誕生したのである。一方ハチャトゥリアンの甥カレンがモスクワ音楽院で勉学中に作曲したのがこのソナタ。何と作品1である。若い活力に溢れた興味深いもので、緩徐楽章などの豊かなロマン性は、オイストラフの感性に救われた部分もあるだろうが中々聴かせる。（山田）

第8040番　　税込み13200円

バッハ　パルティータ第1、2、6番
カール・リヒター（cemb）
独デッカ／SAWD9913B／1960年録音／ステレオ

36歳のリヒターによる初期録音。特にチェンバロ・ソロはいずれも手に入りにくい。重みのある響きと輝きを聴けば、チェンバロとは決してピアノの前身ではなく、むしろピアノには表現不可能な音楽を生み出していたと、こうした名人芸を聴けばそう考えざるを得ない。バッハがピアノを前にしたら恐らくこの音楽でなく違った音楽を創っていただろう。私はチェンバロ音楽の完成者はドメニコ・スカルラッティだと思っているが、リヒターの表現力によってバッハの音楽がこれほどの強さと深味を持っていたことを教えてくれるのがこのレコードである。だが、精神力に裏打ちされた中に、何とも言えない人間味を感じるのも事実である。（山田）